五省訓

1.至誠に悖るなかりしか。
1.言行に恥ずるなかりしか。
1.気力に欠くるなかりしか。
1.努力に憾みなかりしか。
1.不精に亘るなかりしか。

五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41—2481(代)
発行人 西能 正一郎

医の倫理の実践
緊密なチームワーク
医学の終局の目的

「医療は三つの要素から成っている。病気と病人と医師と。医師は医療の僕(しもべ)であり、病人とともに病気と闘わねばならない」。

これは古いギリシヤの哲人ヒポクラテスの言葉であり、われわれ医療人は二千年の長きにわたってそれを唯一の拠(よりどころ)とし、また治療への原点として踏襲してきた。

そこに美しい東洋的医学の伝統が維持され、いわゆる「赤ひげ」の存在も育まれた訳である。

最近の医療の傾向はどうか。たしかに今世紀の技術革新は科学の粋を集めて、診断や治療の高度化を促し、細分化による医学の専門化を進めて来たが、一方において医師と病人との疎外感を強めてきたことは否めない現実の姿でもある。それは人と人との触れ合いではなく、冷たい物と物との唯物論的付き合いに堕しつつあるのではなかろうか。

医療は、駅で切符を買う時や、銀行でキャッシュ・カードを扱う時の様に、冷たい人間同士の触れ合いであってはいけない。それはいわば高度成長の落とし子でもあろう。

金さえあればタクシーに乗って病院に通うことも容易であろうが、然し、街角で一人一人の病人を拾って行ってくれる西能病院の患者専用バスに乗ることによって初めて、病院と病める人との温かい触れ合いが造られて行くものと考えられる。それは無言の対話でもあろう。

対話のある医療を

手と心の温かさが

最近、大都市では診察が終って薬局の前へ行くと、(時には番号が書かれた)薬袋がベルト・コンベアに乗って流れてくる病院が出来始めた。これを病院の近代化という。然しそれはまことに味気ないスーパー・マーケット式商法でもあろう。矢張り、薬袋はそれを処方した薬剤師の手からじかに病人の手に渡されることによって渡す人の手と心の温かさと、病める人への思いやりとが伝わってゆくのであり、それが本当の東洋的医療の本質でもあろう。

大手を振って街頭に

二十世紀の医学の進歩は実に素晴らしいものがある。今まで原因がわからず、治療法も確立されなかった多くの病気が克服されつつある。殊にリハビリテーションの器械には、目を見張らすものが多く開発されつつある。昨年は国際障害者年でもあり、障害者の人々も大手を振って街頭に現われ、人間対話の場を獲得し得たことはまことに喜ばしき医学の勝利でもある。

然し未だ多くの難病、特にガン、心臓病、脳卒中の三大疾患は、医学の前に立ちはだかる厚い壁でもあり、毎年数百万の患者が毎日病院の中で失望感を抱きながら、日夜病床に呻吟しているのが、きびしい現実の姿でもある。

病室とは、いわば社会から閉ざされた存在とも考えられる。そこに医療の困難さと医療人の責任の重要性が要求される訳でもあろう。

病気の克服に努力を

最近、病院におけるチーム医療という言葉がやかましく叫ばれている。それは、医師、看護婦、コーメディカル(医療協力者)の人々が一団となって病人の治療に当ることである。即ち、それは西能病院の様に互いに緊密な連けいのもとに、一人一人の病人に協力して施術を行うことであり、病人も希望を持って自分の病気を克服する様に努力することであり、その結果美しい真の人間的対話の場が造られて行くことにもなろう。

このチーム医療の良否が患者の矛盾を大きく決定する最も重要な要因であり、また閉ざされた病室を外に開くことでもあり、更に、それは医の倫理の実践でもあり、医学の終局の目的でもあるといえよう。

宗教的理念を超越

かかる意味で、私が冒頭に引用した格言が生かされるのであり、「医師にして哲学を志す者は神に近づく」というヒポクラテスの言葉が理解される訳でもあろう。

医の倫理とは、治療する人と治療される人との素晴らしき対話の結晶したものであり、それはまた宗教的理念を超越するものでもあろう。今や日本の医療は、真の人間的対話を最も必要とする時代であることを銘記すべきでもある。

(富山県立中央病院長 村田 勇)

◇ ◇ ◇ ◇

松下君が来院した
~二年目の国際障害者年へ~

西 能 正一郎

漫談にもならない話であるが、脊椎外科をライフワークにしてきた本人の私が、激しい腰痛に襲われ、ついに椎間板ヘルニアの手術を受ける羽目となった。

術後一カ月余、未だ床払いも出来ぬままに、自分の病院の一室でうろうろしていた12月6日の夜10時近くなって、突如として車椅子の松下英勝君(本紙「美しいものが見えてきた」の筆者)の来訪、お見舞を受けた。

赤シャツにセーター、トレパンに運動靴。車椅子には水筒をくくりつけ、ポシェット風の袋を肩からかけた松下君は、私の病室の扉を押し拡げるようにして、なだれ込んできたという表現がふさわしかった。

そして、第一声は「せんせい、とうとうこれた。とうとうこれた」と、わめくようであった。私には岡山にいる筈の車椅子の彼が、どうして病室に現われたのか、事態を理解するのにしばらく時間が必要であった。

"せんせい、とうとうこれた"
善意に守られた車椅子

たたみかけて語ってくれた彼の話によると、私が病気で寝ているという風の便りを聞いてから、彼はなんとかして富山にゆきたいと、「みすず荘」の寮母さんや、おかあさんなどに相談したが、誰も本気になって取り合ってくれず、かえって無暴をいさめられるような結果だったので、独力で行動を開始することとした。

ひそかに準備を始め、当日朝早く、明石まで買物に行くと称して外出届を出し、知人に延々120キロ余の道のりを送ってもらい、明石の駅前で降りたのが午前10時。明石まで行けば省線電車があって車椅子でも大阪までは行くことが出来るという発想であったが、プラットホームが高い階段の向こうにあることを初めて知って、第一歩から「お願いしまーす」を連呼して、車椅子を運び上げてもらわねばならなかった。

大阪駅では駅員さんに貨物用リフトで「雷鳥」のホームまで運んでもらい、さらに駅員さんにおぶさってグリーン車の人となった。富山駅では、鉄道公安官に三人がかりでタクシーに乗りかえさせてもらった。その間の食事のことから尿の始末、そして富山にきてから荘に電話して了解を得たことまで、事細かに語る松下君の顔は上気し、目は涙にうるんでいた。私共は手をとり合って一年八カ月ぶりの再会を喜んだのである。

おとぎ話のような彼の15時間に及ぶ冒険を聞いて、私は胸を打たれ、絶句せざるを得なかった。

彼の勇気をたたえるとともに、昨年一月から始まった国際障害者年の大キャンペーンが、単なるお祭りさわぎに終らないで、このように一人の障害者に勇気を与えた原動力となった。そしてそのキャンペーンによって、一般市民や国鉄の皆様方が、精一杯の協力を惜しまなかった場を作る基礎作りになってきた事を障害者の皆様を案ずるものの一人として心から喜ばずにはおられない。

今年からまだ続く国際障害者年第二年目、第三年目も地味でもよい。確実な成果をあげることを期待するものである。

翌日、松下君は「私は障害者のプロになるよう頑張ります」と、さわやかに約束して仲間の待つ「みすず荘」へ帰って行った。

あすなろ

新年を迎えて、まずはおめでたい長寿のお話を。県内ではただ今のところ年に五~六人が満百歳を迎えているが、全国の百歳長寿者にきいた昨年末のアンケートによると、長寿の秘訣に半数以上が「物事にこだわらず、くよくよしない」をあげている▼しかし、忘れてならぬのは、ぼんやりしているわけでなく、自ら活動する能動的なことに多くの安らぎ楽しみを見出していることだ。といっておおげさなことでなく、家族との語らい、テレビ観賞、友人との世間話、散歩、読書(新聞、雑誌も含め)などをあげている▼「世の中の動きに関心があるか」という問いに対しては予想に反し、やく三割が関心派だったという。五感を働かせ、脳を活発にすることが長寿のひとつの要因とみてよかろう。それで思い出すのが、ことし数えで百八歳になった京都・清水寺の大西良慶貫主のことだ▼"茶寿"というので、新春には昆布と梅干の「おぶく茶」で自ら祝ったそうだが、やく四十分も記者会見したというから驚く。「最近、自由主義になって、親は親らしく、子は子らしくという"らしく"がだんだん顧みられなくなってけじめがないようになっているの」と例の"良慶ぶし"で社会風潮を批判したという▼「欲があると長生きできん」というのが持論で、五年前に「清水説法」を聞いたことがあるが、百人一首の「忍ぶれど色に出にけり…」をあげ「忍ぶことが大切なの。あれ気に入らん、これいやや、いうてんと、苦しみを忍んで勧めんとあかんの」といっていたハリのある、つややかな声が甦ってくる。

迎 春

医療法人 財団五省会

理事長 西能正一郎
常務理事 林 敏彦
理事 住 栄作
理事 米田寿吉
理事 岸口 繁
理事 西能綾子
監事 石川 実
監事 筧田英二
評議員 稲垣忠一
評議員 尾山征一郎
評議員 重松為治
評議員 神沢幹夫
評議員 西能 孜
評議員 西能 竑
評議員 坂本重一
評議員 土田亮一
評議員 豊田文一
評議員 古沢富美
評議員 堀 政夫
評議員 松井元太郎

健康法の問題 (7)

矢野三郎

雪の中は血圧を高くする
環境や地域性の影響も

健康法といえば一般に個人的な健康法が重視されているが、社会的要因や環境因子が個人の健康におよぼしている影響も大きい。健康上、好ましくない環境で生活している人がいかに個人的な健康法につとめても、環境が改善されない限り、健康は保障されないであろう。

労働省の調査によると、昭和五十五年における「じん肺」の患者数は約四万人もあり、各種製造業、鉱業、建設業など多彩な業種に従事している人たちが、この病気にかかっている。これは一種の職業病であるが、近年、労働衛生対策が積極的にすすめられているにもかかわらず、なお成果が充分あがっているとはいいがたい現状である。作業工程や工場の設備を改善して職場における環境を良くすることが第一であるけれども、やはり各個人が産業衛生の重要さを理解していることが大切である。

健康法の問題は、さらに地域性ともかかわりあいをもっている。財団法人「健康・体力づくり事業財団」は、このたび「全国市町村別主要疾患死亡率の分布図」を発行したが、これによると、北陸から東北地方にかけての日本海沿岸では、男も女も胃がんや脳卒中の多いことが明らかにされている。一方、肝硬変は西日本、とくに九州、四国、大阪などに多く、肺がんは京浜、中京、京阪神、北九州地方に比較的多いという。

こういった病気の地域性がどんな原因によっているのか、くわしい研究が今後必要であるが、北陸地方に住む者の健康法を考える場合には、とくに胃がんと脳卒中の予防ということを問題にしなければならないであろう。

厚生省は昭和五十五年の国民栄養調査を最近発表したが、脳卒中と関係の深い食塩について、西日本は全体にうす味好きで、厚生省が定めている目標、一日十グラム以下に近づいているが、東北は前年の十五から十五・八へ、北陸は十四から十四・二へふえているという。

脳卒中が多い理由には雪国という条件も関係しているのではないかと思う。雪は個人的な力でどうすることもできないが、雪国では雪国にふさわしい健康法を確立することが必要であろう。庭の植木でさえ、雪囲いや雪つりで冬に備えている。冬を迎え、冬を過ごすにあたって、人間のからだをきたえ、守るために何らかの知恵がなければならないと思う。

コタツに入ってテレビをみながら酒を飲んでいるという姿は風流であっても、健康法という立場からみるとほめられたものではない。しかし年をとると、気温の変化に対して弱くなるので、暖かい部屋から急に雪の中にでるのは要注意である。平生いくら体をきたえてあっても、雪の中にでると心臓や脳血管に大きな影響があり、血圧も高くなりやすい。雪かきも長時間つづけないことが大切で、一生懸命していると疲れを感じないかもしれないが、後で筋肉が痛くなったり、腰が痛くなったりする。これですめば良いが、知らぬうちに血圧が高くなり、脳卒中の原因になるのである。

このように雪が私たちの健康におよぼしている影響は予想以上に大きい。もし融雪装置が広く普及して、雪かきから免除されるようになると、雪国の者は今以上に長生きできるのではないかと思う。

（富山医科薬科大学教授）

こだま

正月をベッドで迎えて

嬉しかった年賀文

右大腿骨々折後遺症で入院中の正月は何か不安でした。ところが、元旦早朝、洗顔をすましてホールに出ると、「あけましておめでとうございます」の二Mあまりの年賀のあいさつ、西能院長がほほえみを投げておられるようで、嬉しゅうございました。朝食には、お雑煮、数の子、黒豆、キントンなど、おいしく戴き、今年の健康を祈念いたしました。

（早川ヒロ）

頭が下がった院長回診

雪のない正月、体の不自由な者にとって外に出れないことは残念です。でも正月休みだというのに院長先生の回診には頭の下がる思いでした。大手術を受けて百日すぎた今、先生方のお言葉を信じ、きっと桜の花の咲く前には元気で退院できることを信じて、リハビリに専念しています。「他人の生活と比較するな。自分自身の生活を楽しめ」を心がけています。

（早川登志子）

手厚い協力にお礼

昨年十二月七日、腰の手術をしたその夕方、山形の母が僕の名を呼びながら亡くなりました。手術の翌朝、家内は葬儀のため山形へ帰りました。そのあと、僕の身の回りを家内よりも気を使っていただいた看護婦さんたち、病室の仲間の人たちの手厚い協力で新しい年をベッドで迎えることができました。おかげで、やっと歩けるようになりました。心からお礼申し上げます。

（村山八郎）

来年は、うんとお餅を

生まれて初めて、病院のベッドの上で正月を過ごしました。215号室にいたのですが、その病室の人たちが、正月だけということで、みんな家へ帰ってしまいました。それでわたしは、201号室で正月を過ごしました。おぞうには、いつも家では、五、六個近く食べていたので、ものたりない気がしました。来年の正月は、家でおもちを十個食べるつもりです。

（古井里佳）

一日も早く社会復帰を

34才になりますが、病院で除夜の鐘を聞いたのは生まれて初めての体験、改めて"健康"という言葉の意味がいかに大切かということがわかりました。と同時に、年に一度の大みそかは、家族と一緒に迎えてこそ意義のあるものだと思い、入院するまで健康だったことに深く感謝の念をいだき、今後は治療に専念して、一日も早く社会の一員として復帰できることを願っています。

（林　達雄）

普通の日常生活に感謝

生まれて初めて病院で過すという、なんともわびしい、つらい、しかし逆に静かな正月を迎えることができました。そして正月には院長や先生方の心強いお言葉や、看護婦さんたちの手厚い看護でギブスで歩くことができました。瞬時のことであったが、歩けないことのつらさ、不便さを体験してみて改めて普通に日常生活できることに感謝し、退院できる日を楽しみにしています。

（工藤健二郎）

コレステロールが気になる方へ

コレステロールは体に必要なのですが、体内でも作られるので不足することはありません。むしろ取りすぎに用心しなくてはならないのです。その為にはコレステロールを多く含む食品をなるべく食べないようにすることです。コレステロールを多く含む食品のベストテン　1.鶏卵の黄身　2.魚卵　3.獣肉のモツ　4.小魚　5.貝類　6.イカ　7.エビ　8.タコ　9.カニ　10.バターです。　そうでない部分の肉や魚は、コレステロールは少ないのです。鶏肉のささみや、牛豚肉の脂身を除いた肉、鶏卵の白身などは良質の蛋白質を含んでいます。蛋白質が不足すると、からだにさまざまな害を与え、動脈硬化にも悪い作用をおよぼします。ですから、コレステロールの少ない肉を上手にとるようにしましょう。

（栄養士　二口雅子）

「五省会ニュース」は地域社会の皆さまの医療福祉向上に役立つよう務めております。医療、健康に関する要望や、身近な問題などについての投稿（相談含む）をお待ちしています。

わたしは盲導犬"ナナ"です

うれしかった主人の表彰
"英語をうんと覚えました"

私は、西能病院の理療士、古井良洋さん（四〇）に仕えている盲導犬"ナナ"（メス）です。ことしは私の年で、なにか、いいことがありそうな気がします。ところが、ひと足先の旧ろう、主人が、ごほうびを頂戴しました。といいますのは、昨年十二月二十二日、富山市から国際障害者年記念模範更生障害者の一人として表彰されたのです。この日は私も、表彰式場の富山市役所第四委員会室に、パートナーとして同席しました。改井市長が「障害というハンディを克服して、努力に努力を重ねられて社会的に立派に更生され、他の模範となっておられます」と、のべられたとき、私は嬉しくなって、鼻を"クンクン"鳴らし、尾っぽを力いっぱい振りました。左の写真は、式場で記念にとってもらったものです。

私は昭和四十九年生まれのシェパードです。北陸盲導犬訓練所の第一号として五十一年九月十一日に主人のところへきました。県内では三番目の盲導犬だということでした。

私の主な役目は、主人の自宅―西能病院の往復の誘導です。朝は六時十五分ごろに富山市草島の家を出発します。六時四十五分ごろ蓮町駅（富山港線）で乗車、富山駅で降りるのは六時五十六分ごろです。それから富山市電に乗り、新富山で降ります。病院に着くのは七時二十分ごろです。

私は、病院の一隅のせまい犬舎にはいります。一番退くつな時間ですが、じっと、がまんしています。昼食は牛乳一本だけです。でも、朝食と夕食に充分いただいていますから、ご安心ください。朝はドックフード、キャベツ、にわとりの頭二個、ごはん一杯です。夕には、これに、にわとりの頭一個がふえます。

帰りは嬉しいです。長い間、じっと待っているのですから、このときは開放感でいっぱいです。

私は、主人には絶対服従するよう仕付けられてきました。いろんな規則があり、しっかり守っています。いくつかを紹介します。

私は、ハーネス（ハンドル）を首につけられたときから任務（行動）に入るのです。主人の左側の足元につくことが原則です。行動中は、絶対ほえてはいけないことになっています。ハーネスが取りはずされたときから自由時間です。どんな姿勢をとってもいいことになっていますので、坐っているか、伏せています。もう一つ、ツナが首についています。これは私が反則したときに、ぐっと首をしめられて反省するわけです。

私は、主人から英語で指令を受けます。だから、三十近い英語の単語を覚えています。

簡単なものは、カム（こい）スロー（ゆっくり）グッド（よし、よし）ノー（いけない）セット（すわれ）ダウン（伏せ）などです。ちょっと難しいものになりますと、ゴー、ゲート（改札口へ行け）ゴー、キップ（自動販売機へ）ゴー、デンワ（公衆電話へ）ゴー、トイレ（公衆便所へ）ゴー、ブリッジ（歩道橋へ）ノー、スピーク（ほえるな）ストレート、ゴー（まっすぐゆけ）などです。

このように、私は主人が安心して、どこへでも行けるよう、全神経を張りつめて守りつづけています。

主人も、「目標にむかって、"ナナ"とともに勇気をもって歩きつづけます」と、力強くいっております。

主人ともどもがんばりますから、よろしくお願いします。

模範障害者と模範事業所を表彰

富山市は、昨年の国際障害者年記念として、十二月二十二日、つぎの模範更生障害者九氏と、障害者雇用模範三事業所を表彰した。

長井博、田口善雄、堀井みのり、生駒里美子、竹田間佐雄、古井良洋、坂本光祥、射場春吉、舛田勉（むつみ会代表）。

金子電化サービス商会（代表、金子角一）、富山義肢製作所（代表、森田忠平）、北陸銀行（代表、馬瀬清亮）

障害者の方に自動車運転を

障害者の方は、外出の折などに、何かと不便を感じておられると思いますが、自動車の運転免許を取得する事によって外出の機会も増え、行動範囲も広がる事と思うし特に足の不自由な方にとって、自動車は自分の足となり得るのではないでしょうか。

自動車を改造する事によって、両足の不自由な方は手で、片手の不自由な方は効き手と両足で、片足の不自由な方は両手と片足で、又体幹機能障害の方も、その障害の程度により運転する事ができます。

富山県では、これらの身体障害者の方々のために2台の自動車（1800cc、1500cc）を改造し、新庄にあります富山自動車学校で、自動車教習を行なっています。直接の窓口は、県・市の社会福祉事務所になっておりますが、詳しくは当院ケースワーカーにご相談下さい。

（ケースワーカー　高村美和子）

ねんりん

西能病院のあゆみ ⑧

富山市五福で開院した西能整形外科病院

「世の中で一番美しいことは、すべてのものに愛情をもつことです」（西能病院四階会議室にかかげてある額、福沢諭吉の"心訓"から）

昭和五十七年の初春を迎え、西能病院は、また一つ"ねんりん"を力強くきざみこんだ。西能院長はじめ職員一同、心を新たにして"愛情"をもって患者さんに奉仕することを誓い合った。

さて、西能院長が、芽生えた使命感から富山市五福に西能整形外科病院の建設に着工したのは昭和三十八年の十月。完成したのは同年の十二月であった。

新設した病院は福野小学校の木造二階建て校舎を建て直したもの。十八室、四十七床で、診察室、手術室、物療室、給食室など。

病院と医院の大世帯に

ここで、説明しておかなければならないのは、医院（富山市星井町）と病院（富山市五福）の関係である。外来の診察と手術は医院でおこなった。そして、手術後の患者、入院治療を要する患者は病院へ移した。いわば、病院は入院専門になったわけである。医院にも手術後の入院患者がいた。この給食は病院からはこんだ。

昭和三十八年の年末から三十九年の初頭にかけて、医院から病院への患者移送、設備の搬入などでてんやわんや。

医師二人（院長を含む）、職員は二つあわせてやく四十人。病院の事務長には農協滑川病院から堀政夫さんを迎えた。入院患者は、昭和三十九年一月で、二つあわせてやく五十人。

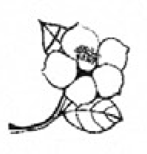
病院と医院の二つをかけ持ちの西能院長のスーパーマンぶりは次回で詳しくのべるが、「めちゃくちゃに元気よくて、忙しかったことは事実です。チョウネクタイで桜木町をのし歩いたものです」（西能院長）と、いうことになる。

さて、この病院の開院で一番の難題は整形外科専門の医師（一人）の獲得であった。医師がもう一人おらなければ、開院（病院）の許可はおりない。ところが、県内にはいなかった。そこで西能院長は大学時代の恩師である京都府立医科大学の諸富武文教授（現日大附属永山病院長）に頼みこんだ。諸富教授は、昭和三十七年三月、西能院長に「整形外科一本でやりなさい」と、明快な指針を与えている。

わたしはこう思う 〈8〉

触れ合い求めて、二回診察
全人医療を目指し、接触を大切に

医療法人財団五省会　西能病院　理事長　西能正一郎



提唱される全人医療

――最近、ドクターの口から"全人医療"という言葉がしばしば聞かれますが、これはどのようなことでしょうか。

「このところ医学が非常に分化してきましてね。これは医師の数がふえてきたためでもあるし、医学が進歩したためでもあるんですが、分化したためにそれぞれの専門科ができ、その専門科の中でもさらに身体の一部分だけを中心に診るような細分化傾向になってきました。同時にまた、医学の方法論自体にも進歩ができて、いろんな器械を使うようになりました。そうなってきますと、つい患者さんの病気を自分の小さな範囲で診てしまって、患者さん全体として捉えることがなくなってきますね。こうしたことに対する反省として全人医療がいわれだしたんだと思います」

――医療技術の急速な進歩に対する反省ということですね。現状では、具体的にどのような不都合が起きるんですか。

「そうですね、こういうことがよくあるんです。患者さんがこられたとします。レントゲン写真を撮る、血液検査をする、尿検査もする。その他いろんな検査をやりますね。それらの検査データでもって病名診断をしてしまう。しかしそうなりますと、検査データに主力が置かれて、患者さんの顔もみないで病名をつけたり、或いは薬をだしたり、処置をしたりするという弊害が起こりうるわけです。弊害というより、むしろ危険性があるわけですね」

怒る患者

「或る入院患者さんに聞いたんですが、熱がでたので診察をおねがいしたところ、たまたま検査データだけでこういう病気だと先生が判断をおろし、投薬した。看護婦さんが薬を患者さんに持っていったら、患者さんは"いや、私はぜんぜん診てもらっていない。どうして病気がわかるんだ"と怒ったそうです」

医師は病気の人間を診る

――患者さんの気持ちがわかりますね。

「ハイ、医学の方法論が進歩したために、実際いいますと患者さんを見なくても病名をつけれる場合もありますが、しかし、ベッドサイドにも行かないということになりますとね……。

それに、同じカゼの薬でも、微妙な処方というものはやはり患者さんの顔をみてでないとできないこともあるんですけれども、なかなかそこまで思いがいたらない」

「まあ、このような危険性があるために、検査データ偏重を避けて、もう少し患者さんの背景なり、また全身の状況を直接にみることが重要であるということでしょう。つまり、医師は病気のみを診るのでなく、病気の人間を診るということが、全人医療の考え方ではないでしょうか」

"心のつながり"を大切に

――先生の病院では、そのあたり、どのように配慮されていますか。

「そうですね、こんなことがあります。新患を診る担当医が、必要な記録や検査データなどをすべてそろえ、病名がつきます。たまたまその方が入院なさると、主治医が必ずもう一度診察をしなおすんです。

私が新患を診て入院していただいた場合でも、担当医は必ずその患者さんをもう一度診察します。といいますのは、実際は病名が違っているわけでなく、治療方針も私が決めたとおりにやっていけばよいんですが、担当医は患者さんの背景なり、人間なりというものをみるために、つまり患者さんの心と自分の心の接点をみつけるためにもう一回診察するわけです。

担当医は、みんな私より若いわけで、まあ勿論私もみおとしもあるかもしれませんが、みおとしをみつけるために診察をするのではないんです」

「おかしなもので、そういうことをしておかないと、病室へ行って患者さんを診ても気持ちのうえでピタッとこないんですね。こういうことが、いまおっしゃる全人医療という考え方に一応近いんじゃないかと思います」

担当日はなれ婆ちゃんのお守り

――私たちが気の付かないところにまで、いろいろ神経を使っておられるんですね。

「このあいだも、90才のお婆ちゃんがね、脚の骨を折って入院して来られました。初めは担当医がずっと全身の状態をみていたんですが、私が回診にいってこれはあかんなあと思ったものですから、"お婆ちゃん、元気をださんといかんぞ、脚の骨の折れたのぐらい、すぐ治せるんだから"と元気づけていました。まあどうにか手術が終わった。しかしお年寄りなものだから、フワーっと一日中寝たきりのようになるんですね。ところが私がそばへいって耳元に口をつけ、"お婆ちゃん、元気か"というと、むっくり起きあがってニコニコ笑うんですよ。それがほかの人がいってもダメなんですね。それで一日、私が顔をみにいかないと、婆ちゃんグターっとしてメシも食べないんです。そうなりますと、私は自分の担当の日であろうとなかろうと、婆ちゃんだけはみにいかねばならないんです。その婆ちゃんは、いまは元気になり、お風呂にも入れるようになりました。

私は別にこれといったことをしているわけでなく、ただ耳元でオイ、オイといっているだけなんですが、そのことがかなり活力を与える原因になったのでしょうかね。

婆ちゃんは、むっくり起きた
ベッドサイドの呼びかけが活力に

まあ、そのようなことで、私たちは単なる脚の骨が折れたのだけを診るのじゃなくて、人間としての患者さんの全体を捉えなければと考えています」

患者の社会的背景を知る

――ほのぼのとするお話ですね。それで、整形外科の立場として、特に全人医療とのかかわりはあるものでしょうか。

「大いにあると思いますね。整形外科では、特に全身を診よといいますけれども、それだけじゃなくて、その方の置かれている社会的背景をあるていど理解しておかないと治療方針がたたないんです。

私が大学にいたころからいわれていたことなんですけれども、整形外科の病気というのは、生命を相手にするんじゃなくて、社会的な能力を相手にする場合が多いんですよ。ですから、その人の社会的背景がわかっていないと治療方針がたちません。病気が一〇〇%治らないとすれば、どこで手を打つか、その人が社会的に一番デメリットの少ない方法を考えねばなりません。

同じような骨折でも、この人は治ったあと働かねばならないのか、或いは息子さんたちが身の回りにいてくれるのかどうか、そのようなことを充分知っておく必要があるわけです。その点、私たちは患者さんの社会的背景、人間としての患者さんということを気にするよう躾けられていると思います」

社会と付合う意欲を

――先進的なリハビリ学者などは「リハビリは普通、社会復帰とか機能回復などと訳されているが、単に手足などの不自由を治すということだけでなく、むしろそれは枝葉末節のことであって、人間らしく復活する。生き返るといってもよいくらい"全人的なもの"だ」といっていますね。

「確かにそれはいえると思います。実際に指が動く、足が動くということは、動いたから役に立つとは限らないわけです。逆に動かなくても役に立つ場合もあるんですね。つまり、その人が社会にでたとき、わずらった手や足がどういう役割を果たすかということが問題なんです。そしてどういう役割を果たすかということは、その人がどれほどの意欲をもって社会と付き合っていくかということによって決まります」

障害を克服生きいきと

――なるほど、先生は専門家として大勢の患者さんを扱ってこられたわけですが、よい具体例をお聞かせください。

「そうですね。中風で入院していた患者さんが、退院して二年ぐらいたって病院へこられました。その人の歩く姿、足の動かしかたをみていますと、あれほど真剣に病院でやっていたよりも随分すばらしくなっているんですね。"随分よくなったね"といったら、遊んでいてもおもしろくないので、ランの栽培や畑仕事をしているんだというんです。

同時にその人がいったのは、退院した当初、新聞を読んでも、何が書いてあるのか頭に入らなかった。それが身体を動かしてから、だんだん頭に残るようになってきたそうです。そのうちにペンを持って字も書けるようになった。このことは、その人がいかに社会的に必要な立場に戻ったかということですね」

（この項つづく）

夢をふくらませよう

西能院長らが新年会で挨拶

西能病院の新年祝賀会は、一月四日午後五時から同病院四階ホールでひらかれ、西能院長はじめ西能竑副院長、各部長らが、それぞれ新年の抱負や決意をのべた。西能院長は「夢を抱き、夢を持って毎日を暮らすことが非常に大事なことだと思います。夢でも実現しないような夢は空想です。現実に即した夢を持って、その夢に一歩でも近づくように日ごろ努力し、情熱を傾けるということです。今年も、みなさんと一緒に、西能病院のよくなっていく夢をふくらませていきたいと思います」と、決意をひろうした。以下は、あいさつの要旨。

新年にあたり、西能病院のトップとして正月に考えたことを皆さんにお話しておきたいと思います。

松下幸之助は、ご存知のとおり〝大松下〟の会長として、今も日本経済を引っぱろうかという意気込みをみせております。この人は最初は単なる電気のソケットをこしらえる会社だったのです。もしもソケットを作ることだけで「我事成れり」と考えていたとすれば、今日の松下はなかったはずです。そのとき、そのときで、「それでもなお」という夢があり、その夢を少しづつ実現してきたからです。

それで私は正月に、〈トップに立つものは常に夢を持つ必要があるんじゃないかなあ〉と考えたわけです。幸い、その夢の第一歩が現在槌音高く建築されていますが、それはもう夢ではなく現実のものであります。

これから、また次の夢をふくらませて、みなさんと一緒に病院を、よりよく、意味のあるものにする、それが私の生きがいであり、みなさんの生きがいでもあったらいいという風に考えるわけです。

いまや、内憂外患、大変なときであります。年頭にあたりみなさんと一緒に現実の夢に向かって一歩一歩前進する決意をのべさせていただきました。

（西能正一郎院長）

診療体制を充実

一九八二年は、わが西能病院にとって重要な試練の年となります。一年後の完成を目ざして増改築工事は着々と進行しておりますが、その間、何かと御来院の皆様に御迷惑をおかけすると思います。このマイナス面を全員が一丸となって、はねかえさねばなりません。

それには、さらにきめの細いサービスと真の思いやりが必要であります。この努力によって一段と飛躍し充実した西能病院に成長する力を蓄える一年としなければなりません。

また医局では、四月にスタッフの増員が予定されております。診療体制の再検討と研究活動の充実をはかり、医療の向上を目ざして頑張りたいと考えております。

（西能竑副院長兼診療部長）

綿密な資金繰りを

経理部としては、大事業である第三期増改築工事に対して、めん密な資金繰りを立てて、今後の目安にしたいと思います。また、病院経営上、必要な資料は、いつも提出できるよう努力いたします。

（西能綾子経理部長）

よい環境づくりを

西能病院の第三期増改築工事は二年目を迎えました。昨年は十一月にエネルギー棟が完成しました。今年は新館工事の五階一部六階建てが八月末に完成の予定であります。しかし、その中味は私たち職員が一丸となって作りあげなければならない問題であります。

百人以上の職員が一緒に仕事をするときは、よりよい環境づくりが大切になるわけです。それで、今までのファミリー的なものを組織の中でいかにして生かしていくか、それは全職員ともども考えなければならない問題であります。

これからは、医療をとりまく情勢は一段と厳しくなります。その中で、「二人でせめて三人ぐらいの仕事を」していただきたく、皆さんのご協力をお願いする次第であります。

（中島総務部長）

規則規定の見直しを

今年は、公私立を問わず病院医療の危機であるといわれています。それをふまえながら、私は自分に与えられた仕事の中で、二つのことを今年の目標にして達成していきたいと思っています。

一つには、病院の物品材料などの購入管理に、もっと競争原理をとり入れ、いい品物を安く入れることです。これが経営基盤を支える役割になります。

第二点は、法人組織にふさわしい規則規程あるいは帳簿様式などの書類の整備をやってみたいと考えています。今、それぞれ個々には決められたことがたくさんあり、それなりの歴史をもって定着しているわけですが、従来の規則規定の見直し、体系的な整備も大切です。

（守内業務部長）

心の看護を

今年の抱負は、看護の心を忘れず、心の通い合った看護をすすめてまいりたいと思っております。それは、私たちが患者さんに接したときに、五感を十分働かせて観察し、その患者さんのためのキメ細かい看護活動を行うことです。看護者側の実践ずみ看護ではなく、患者さんが本当に求めている、その人のための看護を目指して行きたいと思っています。

看護部では、さらに看護研究や看護記録の向上に研さんを重ねてまいります。

私自身としましては看護への情熱をさらに燃やし続けていきますが、私一人でできるものではありません。みなさんと一緒に和を大切にして頑張りましょう。

（山本看護部長）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

美しいものが見えてきた 〈第八信〉

松下英勝

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

障害者福祉展会場の松下さん、左は松下さんが出品した「ひまわり」

〝時は金なり〟と、信念を

西能病院を訪れた松下さん

松下英勝さん（岡山県津山市瓜生原三六二の一、社会福祉法人、重度身障施設みすず荘）が、旧ろう、はるばる岡山から単身、折りたたみ式車椅子で西能病院を訪れた。「西能院長が病気」を風の便りに聞いて、いても、たっても、いたたまれず、見舞いにかけつけたもので、元気になった院長と一年八ヵ月ぶりに再会を喜びあった。

十二月六日午後九時半ごろ、西能病院の玄関で「車椅子の松下」というタクシー運転手の大声がするので夜勤当直の金谷婦長らが出てみると、当の本人が、「院長の見舞いにきた」と、てれくさそうにニコニコしていた。みんな〈どうして富山へこれたのか〉と、目を疑ったという。

早速、院長に連絡をとった。そして、この夜は院長に副院長も交えて夜ふけまで語り合い、病院の特別室で一夜を明かした。

翌七日、松下さんは、朝礼で職員たちにあいさつ、「時は金なり」（別項）と、信念をのべた。「みんなの顔がみたい」と、病院内をひと回りして、入院患者さんや看護婦と旧交を暖めた。

そして、正午ごろ富山の友人の〝厚意の車〟で岡山へ帰った。

【朝礼でのあいさつ】（概要）

一番わかりやすく、金銭的に換算してお話すると、たとえば、一日二千円（人件費）ほどの介助をしてくれる。それを一生懸命、何か靴下一つはいたり、いろんなことをして、できることをやれば、一時間かかるものが四十分で済むかもしれない。あとの二十分は自分で人件費をうかすことになる。となれば、その人が何百円かは、自分が自分の体で利益を得たことになる。

他に重度者がいる。その人たちは一日二千円の介助しかないかもしれないが、本当は三千五百円の介助が必要かもしれない。自分には二千円の介助を目安にしてくれているけれども、本当は千二百円でいいかもしれない。そして、あとの八百円を重度者に介助してもらえれば、その人は助かる。

自分でパンツをはきかえ、自分で歯をみがき、いろんなことを日常の介助を少しでも自分でできて、介助者の手がはぶければ、その時間というものは、「時は金なり」である。

自分にはお金はないが、時がある。ということは、たくさんお金があるということだ。時が金であれば、自分は貧しくない、お金持ちだ。そういう気持ちで、いつも一生懸命やればと思って、一生懸命やっている。

【金谷婦長へのお礼の手紙】

金谷さま、病院では色々お世話になりました。六日の夜、婦長さんの当直で救われた気がします。岡山より汽車の旅、疲れて疲れて、でも、一年八カ月ぶりの病院のベッド、それも特別室、おかげで、ぐっすり眠れました。

でも、少し心残りなのは、自分は朝礼の時、ボーッとなってしまい、入院当時お世話になった人達に〝こんなに元気になりました。ありがとうございました〟のお礼の言葉をいい忘れ残念に思います。婦長さんから皆さまによろしくお伝え下さい。自分は、友達に岡山まで送って貰い、無事「みすず荘」に着き、九日、忘年会をして、また元気に荘の生活に頑張っています。

結局、ゆっくり話もできませんでしたが、皆さまの、そして院長の元気そうな姿を見て心が落ちつきました。

婦長さん、くどいようですが、皆さまに、くれぐれも体に気をつけて頑張って下さいと、お伝え下さい。

☆

☆

本年もよろしくお願い申し上げます

医療法人　財団五省会　西能病院職員一同

青木茂　穴倉栄　荒井紀夫　荒井三津子　荒井春美　新川弘美　五十嵐静子　石倉喜一　一島洋美　伊藤勝仁　井上千恵子　井上敦子　今井礼子　岩城真由美　岩井幸子　江尻栄子　老田奉夫　大島佐登美　奥野和子　奥平美和子　小幡英子　大日方夏代　面谷秀雄　片岡美代子　金谷智恵子　唐島田美和子　川口知明　川崎喜代美　川西明美　川西信子　北井ひとみ　北野佳代　木下文雄　久世智保子　西能正一郎　西能竑　西能綾子　坂井さち子　坂田隆夫　志鷹淑恵

上不雅子　杉浦えみ子　杉村洋　関待子　高田忠美　田上慶子　高村美和子　竹林一子　竹丸道夫　多胡悦子　田中純子　田中真由美　田中行久　谷英美子　谷川美和子　谷野ノブ子　田畑朱美　塚原博子　津田勝美　津田美智子　土田智恵子　坪内奈津子　寺崎民子　飛田勉　土山隆子　中島曠　永森房子　中山栄子　中山益美　西尾柳子　服部真知子　林真由美　広長百合子　伏木峯子　藤沢伸江　二口雅子　船木芳美　古井良洋　古沢富美　堀政夫

堀井富美子　前田静香　松倉伝治　松田伊佐子　松永喜志子　松永幸恵　水口洋子　水島敏子　三ツ松節男　三原美樹雄　三原八重子　宮尾英新　宮本直美　村田次子　桃井玲子　森一美　守内弘義　森川渥子　森田由紀　安井好子　安川敏一　安川みどり　安田十四子　山口明江　山本玲子　用水とも子　吉岡勉　吉崎秋子　吉崎智　吉田範子　吉田美喜子　吉村靖　吉本和子　鎧政行　鎧貢　若栗悟

（以上、百十六人、五十音順、昭和五十六年十二月末現在です）